

〈研究論文〉

W. G. アストンの『文語文典』における「活用しない主要語」の改訂 ——記述の視点の変化と人代名詞・指示代名詞の体系の再編——

吉 田 朋 彦

【要旨】

本稿の目的は W. G. アストンの『文語文典』における「活用しない主要語」の記述とその改訂が、どのような視点からなされたかを考察することである。第2版と第3版の内容はほぼ同じであることを確認し、初版と第2版を比較した。その結果、第2版では、扱われた語数の増加や意味論的・語用論的記述の充実が見られた一方で、形態論的視点と通時的視点からの改訂があることを明らかにした。そして、人称代名詞と指示代名詞の論の変化から、アストンが代名詞観を転換し、「人称」と「人代名詞」と「指示代名詞」による交差分類を作ったことを明らかにした。

キーワード：W.G.アストン、文語文典、代名詞、指示詞

1. はじめに

周知のとおり、ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston) は、幕末から明治にかけて英国の外交官として活動する一方、日本語と日本文化の研究に多くの業績を残した。その中には、話し言葉の文典 (『口語文典』) の4つの版 (Aston 1869、1871、1873、1888) と、書き言葉の文典 (『文語文典』) の3つの版 (Aston 1872、1877、1904) がある。

本稿の目的は、『文語文典』の第2章と第3章の記述を検討し、第3章における Uninflected Principal words (「活用しない主要語」) の説とその改訂の傾向を明らかにすることである。対象は3つの版すべてである。しかし、筆者が初版と第2版、第3版を確認したところ、第3版のための改訂は、漢字の削除や句読点の変更などで、文法の見直しではないことがわかった。そこで、第3版への言及は最低限にとどめ、初版と第2版で挙げられた「活用しない主要語」の下位分類それぞれについて、特に人代名詞と指示代名詞の論の変化に重点を置いて、考察する。それによって、初版でアストンがどこに着目し、そして第2版でどのような視点から自説を整理したのかという改訂の全体的な傾向と、指示詞や人称代名詞など、のちの学説に先行する論の変化を合わせて論じることとする。

2. 先行研究

ここでは、アストンの文典研究のうち、『口語文典』や『文語文典』の全体を対象とした論考と「活用しない主要語」に関係のある論考を概観し、本研究との相違点を述べることにする。

文典全体の研究には、古田 (2010b)¹ と杉本 (1999)、金子 (2010) がある。このうち、金子 (2010) は、『文語文典』を書誌的な視点から検討し、改訂の性格として語例と例文の増補があることを指摘した。一方、アストンの説の変遷を論じたという点で本稿と関連が深いのは古田 (2010b) と杉本 (1999) である。

古田 (2010b) は文典全体についての論考である。そこでは、アストンが3つの関係、すなわちアストンとそれ以前の西洋人、それ以後の西洋人²、国学者との関係で論じられ、アストンの文法研究が明治末期までの外国人による日本文法研究における第3期の代表と位置づけられた。この結論に至るまで、アストンの方法と品詞分類、動詞の活用の扱いが考察された。

その考察の中で本研究の目的と関連するのは、アストンの文法記述の枠組みである (pp. 299-301)。古田によると、動詞の記述には、(1) 動詞の語形変化の提示、(2) 語形変化 (とその接続語) と西洋文法の用法との対応、(3) 西洋文法における法と時制、及び日本語におけるそれらの表現の提示、という3つの段階が認められ、『口語文典』では3つすべてがある一方、『文語文典』では(1)に留まるという (p. 299)。これを一般化すれば、何をどの順序で記述したかを検討することもアストンの文典研究の方法であり、それは本研究の方法の一つである。そしてこの視点からの「活用しない主要語」の研究は、課題として残されている。

杉本 (1999) は、『口語文典』のすべての版を概観し、動詞と形容詞の扱いを論じている。『文語文典』については、第3版の品詞分類と構文論、「詩学 (prosody)」、「てにをは」の扱いについて論じた。しかし、『文語文典』における「活用しない主要語」の扱いや、初版から第2版への改訂については議論がない。

本研究の対象である「活用しない主要語」と関連がある研究には古田 (2010a) がある。古田は、江戸期と明治前期の指示詞の研究史を追い、外国人による研究としてアストンとチェンバレンを論じた。アストンについては、『口語文典』第3版と第4版、『文語文典』初版と第2版に基づき、アストンの説は、指示詞の体系を明示した点と人称と関係づけた点で、チェンバレンの説とも、のちの佐久間鼎の説とも共通点があり、説の形成ではチェンバレンよりアストンの方が早く、指示詞の体系と人称との関係づけは、アストンとチェンバレンの方が佐久間より早いとする (p. 208, 217)。また、いわゆるコ系・ソ系・ア系・ド系の区別を取り上げながら、指示代名詞と人称との関連付けがなされていく過程を論じた。

指示代名詞と人称についての古田の指摘は4つある。まず、『文語文典』初版では、コレとソレが人代名詞であることと、コレとソレの区別、カレ・カノとアレ・アノが指示詞の論に入っていないことである (pp. 209-211)。第2に、『口語文典』第3版と『文語文典』初版の

指示詞の記述から、この時期に、口語ではコレとコノは第一人称の指示代名詞、ソレとソノは第二人称の指示代名詞、アレ・アノは第三人称の指示代名詞という分類が成り立っているという (p. 212)。第 3 に、古田は、『文語文典』第 2 版で、指示詞に対する見解が大きく発展し、指示詞の体系と人称との関連が成立したとみる (p. 214)。第 4 の指摘は、『口語文典』第 4 版で、指示詞と疑問詞が体系的に整理されて一覧表にまとめられ、指示詞がやはり人称との関連で説明されているということである (pp. 218-219)。

この論考は指示詞の研究史を、アストンの説と他の説の関係と、アストンの説の形成に焦点を合わせて論じたものなので、そこから外れた事柄もある。カレやアレが、人代名詞から指示代名詞に変わったのだから、人代名詞の体系も変わるし、指示代名詞や人代名詞の論を、「活用しない主要語」の改訂全体の一部として考察することも、課題として残されている。

古田 (2010c) は、敬語の記述の変遷を『文語文典』と『口語文典』の両方から考察し、サトウとヘボンなどの説と比較した。本稿との関連では、「助動詞」(Auxiliary Verbs) と人称の関係づけ(「謙譲の助動詞」と一人称、「尊敬の助動詞」と二人称・三人称)がある。古田によれば、代名詞と名詞に接続する接辞は、助動詞ほど人称との関連づけが明確ではない。また、尊敬に比べて謙譲に関する記述が少なく、代名詞の記述に会話参加者の上下関係と話者の社会的層は記されているけれど、尊敬や謙譲という敬語の区別が明確ではない (p. 327)。しかし、人称代名詞や指示代名詞、活用しない主要語の改訂の傾向を見ることは、やはり対象外である。

以上、本研究の範囲と研究方法について、先行研究と比較した。その結果、「活用しない主要語」の扱いの変化を論じるために、アストンの視点の変化、つまり初版で何に注目し、文法をどのように構成していたか、そして第 2 版でそれがどのように変化したかを考察することは課題として残されていることを明らかにした。また、人代名詞と指示代名詞を、「活用しない主要語」の改訂全体の中で検討し、指示代名詞と人代名詞の体系の変化を考察することも、課題として残されていることが示された。

3. 『文語文典』における「活用しない主要語」の位置づけと章の構成

本章では、まず『文語文典』の 3 つの版の章構成を、次に「活用しない主要語」が品詞分類の中で位置づけられる『文語文典』初版から第 3 版までの第 2 章の内容を確認する。そして、「活用しない主要語」が述べられる第 3 章の構成を示す。最後に、初版と第 2 版の第 2 章に見られた、本研究と直接関連しない相違点について付記する。

『文語文典』初版は、序文と主要部の 9 章、日本語の実例とその翻訳 (CHRESTOMATHY. TRANSLATIONS AND NOTES.)、日本語文法書の一覧、索引、正誤表で構成されている。第 1 章は、日本語の書記体系と音声と音韻についてである。そして、第 2 章から第 8 章までは語論、第 9 章は構文論である。

主要部の構成は、第2版で変更される。第9章のあとに第10章 Prosody (「詩形論」) が追加され、そこで詩と散文を分ける韻律が扱われるようになった。この10章構成は、第3版でも同じである (ただし第8章には変更がある³⁾)。新たに「詩形論」が追加されたことで、第2版以降の対象は、音声・音韻と語法、文法という言語体系からテキストに広がったことになる。しかし、そのことは「活用しない主要語」の記述に影響していない。

次に、『文語文典』のすべての版で、「活用しない主要語」は、第2章 Classification of words (「語の分類」) で位置づけられる (初版 p. 17、第2版 pp. 44-45)。古田 (2010b: 289-291) が指摘するように、アストンは、「名」「詞」「てにをは」を出発点としながら、活用の有無という基準を「てにをは」にも適用し、結果として4分類を得た。それは、Uninflected Principal words (*na*) (「活用しない主要語 (名)」)、Inflected Principal words (*kotoba*) (「活用する主要語 (詞)」)、Uninflected Subordinate words (*teniwoha*) (「活用しない従属語 (てにをは)」)、Inflected Subordinate words (*teniwoha*) (「活用する従属語 (てにをは)」) である。つまり、アストンは、品詞を、主要語と従属語、活用の有無という2つ軸で分類しなおしている。この分類は、伝統的な分類からの敷衍であると同時に、独自の品詞分類への根本的な変更である。

次に、「活用しない主要語」が扱われる第3章の構成を表1に示す。大文字のみで記されたものが節である (原文通り、大文字で記した)。項の中には判別がつきにくいものがあったが、斜体で記された見出しを項とした。第2版と第3版の相違点は1ヶ所だけなので、表中の注で記した。

表1 アストンの『文語文典』第3章の構成

初版	第2版
UNINFLECTED PRINCIPAL WORDS.	UNINFLECTED PRINCIPAL WORDS.
THE NOUN.	THE NOUN.
	DERIVED NOUNS.
	Roots of Verbs
	Roots of Adjectives
COMPOUND NOUNS.	COMPOUND NOUNS.* ¹
HYBRID COMPOUNDS.	HYBRID COMPOUNDS.* ^{1*2}
HONORIFIC PREFIXES.	HONORIFIC PREFIXES.
	HUMBLE PREFIXES.
GENDER.	GENDER.
	NUMBER.
PRONOUNS.	PRONOUNS.
PERSONAL PRONOUNS.	

List of the more common personal pronouns.	
Pronouns of the 1st. person.	PERSONAL PRONOUNS OF THE FIRST PERSON.
	1. — Japanese Words.
	2. — Chinese Words.
Pronouns of the 2nd. person.	PERSONAL PRONOUNS OF THE SECOND PERSON.
	1. — Japanese Words.
	2. — Chinese Words.
Pronouns of the 3rd. person.	PRONOUNS OF THE THIRD PERSON.
DEMONSTRATIVE PRONOUNS.	DEMONSTRATIVE PRONOUNS.
INTEROGATIVE PRONOUNS.	INTEROGATIVE PRONOUNS.
INDEFINITE PRONOUNS.	INDEFINITE PRONOUNS.
	DISRTRIBUTIVE PRONOUNS.
REFLEXIVE PRONOUNS.	REFLEXIVE PRONOUNS.
RELATIVE PRONOUNS.	RELATIVE PRONOUNS.
NUMERALS.	NUMERALS.
	ORDINALS.
AUXILIARY NUMERALS.	AUXILIARY NUMERALS.
	AUXILIARY NUMERALS OF JAPANESE ORIGIN.
	AUXILIARY NUMERALS OF CHINESE ORIGIN.
ADVERBS.	ADVERBS.
	CONJUNCTIONS.
INTERJECTIONS.	INTERJECTIONS.

*1 ページ上部（柱）に書かれている。

*2 第3版では、この節名が削除された。本文は第2版と同じ。

出典：Aston（1872、1877、1904）Chapter III から筆者作成

最後に、初版と第2版の第2章での、「名」「詞」「てにをは」と西洋文法の品詞の対応の違いについて付記する。

初版では、「名」には名詞と代名詞、数詞的形容詞（numeral adjective）が、「詞」には動詞と形容詞が対応する。そして、「てにをは」には、動詞の活用語尾と形容詞の活用語尾のほか、

冠詞と前置詞も含まれる (p. 17)。

第2版では、「名」に間投詞が追加される (p. 44)。初版でも第3章に間投詞の節があるので、ここで第3章の実態に合わせたことになる。また、「てにをは」からは、冠詞と前置詞が削除される。初版では、活用しない従属語を述べる第6章では、冠詞と前置詞への言及がなく、整合性に欠けていた。それが訂正されたことになる。

冠詞と前置詞への言及は、『口語文典』初版と共通している。『口語文典』初版では、「は」は一種の定冠詞であり、「が」は不定冠詞の役割を果たすこともある (p. 6) とされ、また、英語の前置詞が、日本語では後置詞と呼ぶべきであり、助詞のみならず、「の間に」「のそばに」「こゝて」がそれぞれ英語の前置詞 *between*、*beside*、*over* に相当するともされる (p. 29)。『口語文典』第2版 (1872年) で削除されたことが、同じ年に出版された『文語文典』第2版ではまだ残っていると考えられる。

4. 名詞の記述

4.1 「活用しない主要語」と単純名詞、派生名詞

4. では『文語文典』第3章の名詞論、すなわち冒頭の節「活用しない主要語」から「性」(初版)・「数」(第2版)までの内容について、節の順に考察する。

すべての版の第3章冒頭に、UNINFLECTED PRINCIPAL WORDS. (「活用しない主要語」)の節がある。ここで、第2章の「名」(すなわち「活用しない主要語」)の説明がより具体的になる。

初版 (p. 18) では、「活用しない主要語」には、西洋文法の名詞と代名詞、形容詞的数詞が属すること、そして英語では他の品詞の語でも、日本語では、活用がないために「活用しない主要語」に分類しなければならないことが述べられる。例えば、「いま」や、「なさる」「する」とともに用いる「御覧」である。

第2版 (pp. 46-47) では、「きれい」「しづか」の例が加えられ、「活用しない主要語」の説明がより具体的になる。この2語は、「なる」とともに英語の形容詞に、「に」とともに英語の副詞に相当する。しかし、アストンは、日本語の形容詞には活用があり、この2語は「活用しない主要語」に属することを強調する。

表1の THE NOUN. (「名詞」) から、「活用しない主要語」の具体的な記述が始まる。

初版の「名詞」(pp. 18-19) では、冒頭で単純名詞と派生名詞、複合名詞の分類が提示される。単純名詞については、記すことがない (p. 18) とあり。この節の残りは、派生名詞の説明にあてられる。

初版の派生名詞の記述には4つの視点がある。第一の視点は、形態論的な視点である。初版では、形容詞語根と接尾辞「さ」「け」「み」「ら」による派生名詞が例とともに示される。また、「け」が「気」と同じであるという。第二は頻度である。派生名詞は数が多くないが、

この4つの接尾辞による抽象名詞が最もよく見られ⁴ (p. 18)、「ら」による派生語は少ないという (p. 19)。第三は文体である。「ら」については文体の記述がないものの、「さ」(「高さ」)は書籍でも話し言葉でも用いられるのに対し、「け」(例では「げ」。「なにげ」「あぶなげ」と「み」(「高み」「深み」)は口語では稀とされる (p. 18)。第四は、派生名詞全体を通じてのものではないが、意味論的な視点である。「み」による派生名詞には、抽象的意味と具体的意味があるという。例えば「高み」が英語の‘height’と‘a high place’のどちらも表し、英語の‘height’と同じ曖昧さがある (p. 18)。

第2版では、「名詞」の節は縮小され、初版の冒頭2行、すなわち名詞の下位分類と単純名詞についてのコメントだけになる (p. 47)。初版の派生名詞の説明が、新たな節「派生名詞」になる (pp. 47-50)。

派生名詞の記述は大きく変わる。初版では形容詞語根からの派生だけだったのに対し、動詞語根からの派生が加えられ、「動詞語根」(p. 47)と「形容詞語根」(p. 48)という項が立てられた。これらは本文冒頭に斜体で書かれているので、それだけ見ると位置づけが不明確である。しかし、「人称代名詞」の節で項を斜体で示していることから、やはり項として認めることができる。

そして、派生の種類も増え、動詞語根からの派生と形容詞語根からの派生の2種類になった。また、派生の詳細も追加された。それは、動詞語根と形容詞語根が形を変えずに名詞化する場合(「ちり」<「ちる」,「しろ」<「しろき」)と、形容詞語根の末尾の母音が /e/ に変化して名詞となる場合(「くれ」<「くらき」) (p. 48)と、接尾辞「か」「やか」「よか」「らか」「はか」「さか」「そか」「びか」である (pp. 49-50)。

さらに重きを置かれる視点も変化する。初版に見られた頻度や文体差への言及は第2版で後退し、「げ」「け」の物語での多用が指摘されるだけになる (p. 49)。対照的に、記述が通時的視点と形態論的視点から綿密になったところがある。また、語法や意味の記述も増えた。

例えば、「み」は、初版では「み」は形容詞語根に接続するとされた。第2版では、「み」による派生は動詞語根からの派生とされる。例えば、「たかみ」は、動詞「たかむ」の語根からの派生とし、その根拠として時代を遡った文献では動詞の意味が保たれていることをあげる (p. 47-48)。

また、「げ」「け」は、初版では「け」によって代表されていたのが、対等の扱いになり、活用のない「名」と動詞・形容詞の語根に接続することが明記された。さらに、話し言葉では稀とされた初版の記述 (p. 18)に代わって、物語では多用されることが挙げられ、その語法として、「{げ/け}{なる/に}」(「むくつけなる」「りこうげに」)が形容詞と同等の働きをすることが追加された (p. 49)。これらのことから、「け」「げ」による派生名詞の形態論と語法が、歴史を遡ることでいっそう具体的になったことがわかる。

意味論的な視点からの記述が加わった例として、「さ」がある。初版では、「み」については派生名詞が具体的意味と抽象的意味を持つとされた (p. 18)しかし、「み」については文体

の記述と英訳のみだった。それに対し、第2版では、「さ」から派生した名詞が表すのは、「形容詞が表す特質 (the quality denoted by the adjective)」ではなく、「特質の程度 (the degree of the quality)」であるとする (p. 48)。アストンによると、「おほきさ」は、大きいという性質ではなく、どの程度大きいか、つまりサイズを表すという (p. 48)。また、時代や出典の明記はないものの、古い語法では「さ」が動詞語根に接続する例も挙げている (p. 48)。

第2版で追加された「か」「やか」「よか」「らか」「はか」「さか」「そか」「びか」の記述 (p. 49-50) にも、形態論的な視点が明確に表れる。そこでアストンが述べるのは、活用のない語と動詞語根、形容詞語根にこれらの接辞が付くことによって派生した語が、「なる」と共起して形容詞相当語に、また、「に」と共起して副詞相当語になるということである (例⁵「しづ-か なる」、「しづ-か に」)。

4.2 複合名詞と混種複合語

初版の「複合名詞」から「性」までと、第2版・第3版の「複合名詞」から「数」までが複合名詞を扱った節である。

「複合名詞」では、初版では、和語を対象に形態的分類が提示された (p. 19)。それは、(1) 2つの名詞から成るもの(「風車」)、(2) 形容詞語根+名詞(「あかがね」)、(3) 名詞+形容詞語根(「ともぶと」)、(4) 動詞語根+名詞(「乗り物」)、(5) 名詞+動詞語根(「もの知り」)である。

第2版では、この5分類に変更はなく、そのあとに前項と後項の意味的關係による5分類が追加された (p. 51)。それは、(1) 前項が後項を修飾するもの(「板戸」「少将」)、(2) 漢語で、前項が後項を支配するもの(「開山」「化身」)、(3) 前項が後項に支配されるもの(「火かき」「酒飲み」)、(4) andによって結合されるもの(「貧福」「出入り」)、(5) 漢語で、同じまたは類似した意味の要素が強調や包括性を表すために結合されるもの(「改正」「混雑」)である。

形態的分類と意味的分類は、下位分類の数は同じであっても、対応しているわけではない。形態的分類(5)と意味的分類(3)は、ある複合名詞の形式と意味を表わす関係にある。しかし、形態的分類(4)と意味的分類(2)は、(2)を漢語に限定しているので対応しているとは言えない。また、その他も対応関係は見られない。

HYBRID COMPOUNDS. (「混種複合語」)は記述が簡素で、初版から変更がない(初版 p. 19、第2版 p. 52)。和語と漢語の混種語であること、日本語では、ヨーロッパの言語に比べ、混種複合語がよく見られること、例として「重箱」「破裂玉」などが挙げられている。

以上から、複合名詞の記述では、記述内容は変わらないが、形態論的視点による記述に加え、意味論的視点からの記述が追加されたことを示した。

4.3 尊敬の接頭辞と謙讓の接頭辞

初版の HONORIFIC PREFIXES. (「尊敬の接頭辞」) (pp. 19-20) で扱われた接頭辞は「お」「おん」「み」「ご」「ぎょ」「き」「そん」である。それぞれについての記述は、文体と形態論(語構成・語形成)が中心で、通時的視点は補足的な記述に現れる。例えば、「お」は、文語とは言えないことと、後接語が、基本的には和語だが、例外も多いことが指摘される(p. 19)。「おん」は書簡体という特徴が記されているだけである。「み」は、神とみかどに関する和語と結合するという(p. 20)。その後で、「お」「おん」「み」が「おみ」の異なる形であることと、「お」は、「おん」の音韻変化によって生じたと考えられることが述べられる。漢語の、「御(ご・ぎょ)」「貴」「尊」は、漢語と結合することという記述があるだけである。

第2版では、「尊敬の接辞」(pp. 52-53)の直後に、HUMBLE PREFIXES. (「謙讓の接頭辞」) (pp. 53-54) が追加される。「尊敬の接頭辞」では、和語に改訂のあとが著しい。漢語の記述は、例の追加と、「御(ご)」と和語名詞の複合語があるという指摘がなされたにとどまる。

和語は、扱われた接頭辞が「み」「おほみ」「おほん」「おん」「お」に増えただけでなく、これらの接辞が「み」と「おほみ」に区分されることが段落の区切りからわかるようになった。さらに、語構成・語形成の規則(接頭辞と和語・漢語の結合規則)は、各接頭辞の記述から取り出されて1つの段落に集約された。

接頭辞の記述は、初版が「お」「おん」「み」の順だったのに対し、第2版では「み」を第一に挙げ、次に「おほみ」が置かれる。内容は、「み」は、基本的に初版と変わらないものの、例が増え、説明が明確になった。「おほみ」以下の記述の要点は次のとおりである。

- ①「おほみ」は、「おほき」の「おほ」と、「み」から合成される。
- ②「おみ」「おほん」「おん」「お」は、「おほみ」の省略形である。
- ③「おほみ」と「おみ」は古形で、「おん」が現代語で好まれる形である。
- ④「おみ」は口語では「おみあし」など少数の語ではまだ用いられる。
- ⑤「お」はほとんど口語のみで、よく使われる。

これらから、尊敬の接頭辞が、形態論的視点と通時的視点から整理され、そこに文体的な特徴が歴史的变化を考慮されながら追加されていることがわかる。

謙讓の接頭辞については、例は挙げられている一方、説明がない。漢語の名詞に用いられることと「愚妻」「拙母」「少女」などの例が挙げられただけである。そのため、古田(2010c: 325)が指摘するように、謙讓の定義や、尊敬と謙讓の区別などが不明である。また、通時的視点や形態論的な視点からの整理という他の節で見られる改訂の傾向が読み取れない。

4.4 性と数

初版では、「性」の節で性と数を表す接頭辞が記述されている(p. 20)。第2版では、「性」と「数」という2つの節に分かれる(pp. 54-55)。内容は初版から第3版まで変化がない。それぞれの節の要点を示すと、「性」では、男性を表す接頭辞が「お」「おん」「おうま(牡馬)、

「おんどり」)、女性を表すのが「め」「めん」(「めうま」(牝馬)、「めんどり」)で、これらを含む名詞は複合語であることである。「数」では、畳語によって複数が表示されること(「ところ」と「ところどころ」)、古典文学を除けば、ヨーロッパの言語の複数形とは異なり、every や all kinds of の意味を持つこと、後項の子音が濁音化することである。

5. 代名詞の記述

5.1 人を表す代名詞

5.1.1 「代名詞」、「人代名詞」の枠組み

初版では、PRONOUNS. (「代名詞」) と PERSONAL PRONOUNS. (「人代名詞」) という節がある。しかし、「人代名詞」には本文がなく、結節点の役割しか果たしておらず、第2版では削除される。そこで、本節では「代名詞」と、人を指す代名詞の体系について述べることとする。

初版でも第2版以降でも、「代名詞」では、日本語と印欧諸語 (the Aryan languages) の、いわゆる人称代名詞の違いが説かれている (初版 pp. 20-21、第2版 pp. 55-56)。その要点は4つあり、どの版でも同じである。それは、日本語では人称の区別がはっきりしないこと⁶、人代名詞 (personal pronoun) の使用が限定的で、曖昧さを回避するために用いられること⁷、人代名詞が文にないときは敬語によって推測されること、複数形が畳語と接尾辞によって作られること、である。

人称の区別についてアストンが主張するのは、日本語では人称を表す動詞の活用がなく、代名詞に相当する語があっても文法は名詞と同じであるということである (初版 p. 20-21)。これは印欧諸語の文法との対比の上の論であり、その背後には、印欧諸語では、動詞には人称を示す活用形があり、それに呼応して人代名詞が現れる、という周知の事実がある。

そして、初版では、印欧諸語の文法に従って、アストンは人代名詞の下位分類を3つ設ける。すなわち、「一人称の代名詞 (pronouns of the first person)」、「二人称の代名詞 (pronouns of the second person)」、「三人称の代名詞 (pronouns of the third person)」である (表1 参照)。また、人代名詞は、指示代名詞や不定代名詞と対立するカテゴリーでもある。

ところが、第2版で、この枠組みが変わる。表1で示されているように、「人代名詞」という節とカテゴリーはなくなる。代わりに、「一人称の人代名詞 (personal pronoun of the first person)」、「二人称の人代名詞 (personal pronoun of the second person)」、「三人称の代名詞 (pronoun of the third person)」という、不均衡な分類が設けられる。それゆえ、初版の人代名詞と第2版・第3版の人称の代名詞は、扱われた語は共通していても、枠組みとしては異なっていることになる。

この分類の変更は、指示代名詞の見直しによるものである。古田 (2010a: 214) が述べる

ように、第2版では、指示代名詞が独立したカテゴリーになり、一人称・二人称・三人称の区分が設けられた。この変更が、人代名詞にも影響し、人代名詞の体系を変更させた。これについては5.2で詳述することにし、以下、人代名詞・人称の代名詞について考察する。

5.1.2 一人称の代名詞

一人称の代名詞は、初版 (pp. 21-22) では14語で、そのうち和語は9語、漢語は5語 (朕、臣、予、拙者、撲) である。和語の記述を見ると、人称の代名詞の記述の視点が見えてくる。

和語9語は、アストンの記述から3つに分けられる。1つは「われ」を中心とする語群である。

われ [われら、われわれ、われども]⁸、おれ、わが

これらの記述の中で、「われ」と「われら」「われわれ」「われども」は、文語で一人称代名詞として最もよく用いられる語とされ⁹、「おれ」は、「われ」の崩れた形で、話し言葉でよく用いられる語とされる (p. 21)。

もう1つが、「わたくし」と中心とする語群である。

わたくし [わたくしら、わたくしども]、わし、わたし、わち

ここでも、「わたくし」は口語で最もよく用いられる語と位置づけられる¹⁰ (p. 22)。

この2つ語群以外は、次の2語だけである。

やつがれ、それがし

これらについてアストンは、文語という特徴は挙げているものの、頻度の高さや語根については何も述べていない。

和語と漢語の分類も考慮すると、初版では、語の出自という視点と、書き言葉か話し言葉か、つまり文体という視点、さらに、派生名詞と同じく、よく用いられるかどうかという「頻度」の視点があるということになる。

初版における一人称の代名詞それぞれの記述では、形態論的視点や通時的視点からではなく、意味論・語用論的視点からの記述に重点が置かれている。一人称の代名詞の形態論は、「われ」と「わたくし」の複数形が上記 [] 内の語形であることと、「わが」が「われ」の語根「わ」と所有を表す助詞「が」から構成されていることだけであるし、通時的な視点が明確に表れているのは「あが」が「わが」の古形であるという記述だけである。

それに比べると、意味論・語用論的な記述は豊富である。中でもアストンが重視したのは、古田 (2010c: 327) が指摘するように、人称の代名詞それぞれを、どのような人物が用いるか、また誰が誰に用いるかである。例えば、「われ」は、話し言葉では上位者が下位者

に話しかけるときに用いられ、「わたくし」は同等の地位か上位の地位にある者に対して用いられることが記されている。また、漢語では、対人関係に加えて場面の記述もある。例えば、「臣」は、「愚臣」という形式で、政府に対する請願書の中で高い地位の者に対して用いるとある。「拙者」は、「公式書簡体 (official epistolary style)」で、通常は下位者に用いられる。

さらに、意味の他の特徴も記述されている。例えば「わが」が、「私の」という意味だけでなく、「自分の」という意味もあること、「わたくし」には、「自分自身 (selfishness)」の意味もあることが挙げられている。また、「拙者」は、書簡体で話されたときは威厳のある語調となり、口語で用いられたときは上位者の意味がないという。さらには、方言差（会津方言では「拙者」が「わたくし」の代わりに用いられる）にも言及がある (p. 22)。それゆえ、初版における一人称の代名詞の記述は、語の出自と文体、頻度、意味論・語用論的視点を重視したものと考えられる。

第2版では、既述したように、「一人称の人代名詞」とされる。また、記述の構成全体が変わり、和語の記述も大きく改訂される。構成については、まず和語と漢語が明示的に区分され、語の出自という視点が明確になった。漢語の記述 (pp. 60-61) は、語数の増加（「愚」「妾」「下拙」「愚拙」「野夫」「愚弟」「拙弟」「不佞」「不肖」「鄙生」「少生」が追加された）と、「朕」と「拙者」の記述の補足や訂正である。語数が増加しても、意味が英語で記されているものがほとんどで、アストンの代名詞に対する考えの変化は見られない。

それに対し、和語の一人称の人代名詞の記述 (pp. 56-60) では、通時的視点と形態論的な視点が明確になり、頻度の高い語かどうかという視点と意味論・語用論的視点は後退した。以下、これについて詳述する。

まず、扱われた語は、削除と追加があったため、以下の18語となる。

あ、わ、あれ、われ、わろ、わが、わなみ、
わたくし、わたくしぎ、わたくしかた、まろ、わらは、おのれ [おのれら]、み、
みども、みづから、それがし、やつがれ

そして、初版にあった「われ」と「わたくし」という2つの語群は見えなくなり、上記の「あ」から「わなみ」までが1つの語群をなす。

この語群の改訂として、まず配列の訂正がある。「あ」と「わ」を基点とする派生関係によって語が配置されるのである。「あ」と「わ」は、最も古い語形として最初に挙げられる。初版と異なり、この2語の語誌、つまり『万葉集』では頻繁に用いられるが、その後廃用化することが記される。そのあと、初版では段落冒頭の見出し語であった「わが」が、廃用化した「わ」がまだ用いられる場合という位置づけに変わる。「われ」は、初版で一人称の代名詞の中心だったが、第2版では、「わ」からの派生とされ、「あれ」と並置される。

用法の記述では、まず、「われ」は、初版で「文語で最もよく用いられる語である」(初

版 p. 21) とのみ記されたところが、一人称の代名詞の時代変化を踏まえて、「もっとも一般的な語 (the most general word)」であり、最新の形であると同時に最古の形でもある (第2版 p. 57) と改訂された。また、「われ」の文体の記述は詳しくなる。アストンは「われ」の口語での使用にも言及していて、初版では上位者から下位者に用いられる (その崩れた形が「おれ」としていた (p. 26)。それに対し、第2版では、「われら」が「おれら」と同等に、下位の者への二人称の人代名詞として用いられるという内容に変更された。そして、「われら」は、当時の「現代書簡体 (modern epistolary style)」では相手が下位者のときの一人称単数として用いられることと、「わが」が、「われの」「われが」に代わって用いられるという記述も加えられた (p. 57)。

次に、「わたくし」の用法の記述では、アストンの視点の変化と語群の解消が見られる。視点の変化とは、文体と頻度のどれを重視するかである。初版では、アストンは文体と頻度の双方に注目し、「わたくし」は口語で最もよく用いられる語としていた¹⁰。それに対し、第2版では、口語と当時の「現代書簡体」に属すること、つまり文体の方が前面に出され、頻度は後退したように見える¹¹。語群の解消とは、「わたくし」を中心とする語群がなくなったことである。「わたくし」の記述に、「わたくしぎ」と「わたくしかた」が追加されたものの、初版にあった複数形2語と俗形3語(「わし」「わたし」「わち」)が削除された。それによって、初版の「わたくし」を中心とする語群が姿を消した。

また、「わたくし」の次に「まる」が追加されたことから、「わたくし」を「わ」の派生語とアストンが考えていた可能性もある。アストンは、「まる」の記述で『枕草子』と『土佐日記』、本居宣長に言及していることから、「わたくし」の前に置かれてもよさそうなのにもかかわらず、「わたくし」を先に配列しているのである。

「まる」以降、つまり「わらは」から「それがし」までは、一人称の人代名詞以外からの転用あるいは一人称の意味が弱い語がまとめられている。「わらは」には、字義どおりには「子供」とある (p. 58)。その後は、特定の人称に偏らない「おのれ」と、「身」と関連のある「み」「みども」「みづから」、さらに話者の名前が一人称の人代名詞として用いられる例をはさんで、普通名詞に近い「それがし」と、口語と時代を遡る文語では現れない (p. 60) 「やつがれ」で終わる。これらには、「われ」や「わたくし」の記述の変更に認められた傾向はない。

以上、語の配列と記述の内容の検討から、初版では語の出自と文体、頻度、意味論・語用論という視点からの記述が中心だったのに対し、第2版では、通時的視点と、それに関連する形態論的な視点からの記述が中心になり、頻度や意味論・語用論的な特徴はその記述に織り込まれる形で後退したことが明らかになった。

5. 1. 3 二人称の代名詞

初版で扱われた二人称の代名詞 (pp. 22-23) を配列順に示す。和語、混種語、漢語の順である。ただし、「あなた」が混種語のあとにある。

なんじ [なんじら]、そのもと (別形そこもと、そのほう)、きみ、ぬし、おまゑ、
おまゑさん、おまゑさま、いまし、きさま、あなた、貴君、貴公

初版における記述は、一人称の代名詞と同じく、語の出自と頻度、文体、意味論・語用論的特徴についてである。語の出自は、混種語と漢語に一つ一つ記されている。頻度は、一人称の代名詞と異なり、語の特徴の一つに過ぎない。一人称の代名詞のように語群を作ることはないし、配列の基準になっているようにも見えない。「そのもと」と「きさま」、「貴君」が書簡体で多用されること、「きみ」が恋愛詩で多用されることが記されているだけである。文体の区別は、文語と口語、書簡体の区別のほか、詩で用いられる語という記述もある。

意味論的・語用論的な特徴については、「あなた」を除くすべての語に、自分と比較してどの立場にある者に用いる語なのかという対人関係についての記述がある。「きみ」「ぬし」「きさま」「貴公」には、尊敬や侮蔑という待遇表現的な意味の記述もある。

第2版 (pp. 61-66) では、構成と内容の両方に手が加えられている。構成では、一人称の代名詞と同じく、和語と漢語が別の項に分割された。内容では、まず、扱われた語数は合計で45語と増え、和語は25語に、漢語は19語となった。混種語は「貴様」の1語と変わらず、和語の項で扱われている。以下、扱われた語を配列順に示す。

[和語]

な、なれ、なんじ [なんじら]、いまし、みまし、まし、きみ、わぎみ、おまへ、
おんまへ [おまへがた、おまへたち]、おまへさま、おてまへ、ぬし、わぬし、おぬし、
そこ、そこもと、そのもと、そなた、そのほう、おんみ、おこと、まうと、
こやつ (別形きやつ)、きさま、あなた

[漢語]

閣下、貴下、陛下、殿下、足下、貴君、尊君、尊公、貴殿、貴丈、尊前、仁兄、尊兄、
雅兄、先生、大人、雅君、御前、御邊

次に、各語の記述では、一人称の代名詞と同じように、通時的視点と形態論的な視点が明確になっている。通時的視点は、語の再配列に現れる。初版では配列の基準が読み取れないのに対し、第2版では、歴史的に先行した語と二人称代名詞固有の語が優先される傾向が見える。そのことを示す理由は、「な」「なれ」という二人称代名詞の最古の形 (p. 61) が最初に挙げられたこと、「そこ」「そこもと」などソ系の指示詞の関連のある語が後ろに回ったこと、「おまへ」「おんまへ」以降は、「おこと」を除き、普通名詞に由来することが

記されている (pp. 63-64) ことである。それゆえ、二人称代名詞は、通時的視点から並べ直されたと言える。

そして、形態論的な視点による記述が追加された。その概要は次の通りである。

- ① 「なんじ」は、日本の文法家によれば、「名」と「持ち」に由来する。(p. 62)
- ② 「おまえ」「おんまえ」の語構成。「お」「おん」は尊敬の意を持つ「おほみ」の省略形と「まえ」から成る。(p. 63)
- ③ 「そこ」の「そ」は、「それ」の語根、「こ」は場所を表す古語。(p. 64)
- ④ 「おんみ」は、尊敬の「おん」と身体を表す「み」から構成される。(p. 64)
- ⑤ 「まうと」は、「ま」と「ひと」から。(p. 65)

初版では、語構成が言及されているのは「きさま」のみだったので、第2版で形態論が明確になったことになる。

意味論・語用論の特徴は、初版と同じく記述の中心で、「な」「なれ」「あなた」以外には、誰に対して用いるかという対人関係的な特徴が記されている。中でも、「きみ」と「おまへ」は大きく改訂された。「きみ」は、自分と地位が大きく変わらない相手に用いること、主君に対して用いると敬意が足りない語になることが追加されている (p. 63)。「おまへ」は、尊敬の程度の高い語であり、上位の者に対して用いられること、口語では逆に下位の者や親しい者に用いられることが追加されている (p. 63)。対照的に、「あなた」は文語ではないこと (p. 65)、「おんみ」「こやつ」は、それぞれ尊敬の意と軽蔑の意があること (p. 64、p. 65) が述べられているにとどまる。

漢語の二人の称代名詞も大きく改訂された (pp. 65-66)。初版では「貴君」と「貴公」のみであったのが、19語に増え、これらが公的な文体と私的な文体という基準で大別された。「閣下」と「貴下」、「足下」は「公式書簡体 (official epistolary style)」とされているし、「陛下」「殿下」は文体の記述はないものの、公的な語であることは明らかである。そして、「貴君」から「雅君」までは私的な書簡用の語とされている。ただし、「御前」と「御邊」は明確な記述がない。さらに、意味論・語用論的な記述も明記されている。上記一覧の「尊前」から「雅君」までと、「足下」と「御前」には具体的な記述がないものの、他の語には話し手と相手の社会的関係が明記されている。しかし、語構成や歴史的な記述はない。

以上、二人称の代名詞について考察した。初版の記述が語の出自と文体、意味論・語用論の特徴、頻度から成っていたのに対し、第2版では、和語は配列が通時的視点から整理され、記述も通時的視点と形態論的な視点から訂正が加えられたことを明らかにした。

5. 1. 4 三人称の代名詞

初版 (p. 23) で三人称の代名詞として扱われた語を下に配列順に示す。

あれ [あれら]、あの、あは
かれ [かれら]、かの、こは
あのひと、あのおかた

これらの記述は、英訳と、古形、所有形と形容詞形の相違点、文体差、意味の差である。英訳は、「あれ」「あれら」と「かれ」「かれら」に ‘he, she, or it’ ‘they’ とある。古形は、「あは」と「こは」である。「あれの」「かれの」と「あの」「かの」の違いは並行していて、所有形と形容詞形の違いである。説明のための英訳があり、「あのひと」は ‘that man’ ‘he’、
「あれのひと」は ‘his or her man’ とされている。文体差は、「あのひと」「あのおかた」が、口語では「あれ」「かれ」に代わってより敬意のある形とされている。また、「かれ」「かの」が口語では用いられないともいう。意味の差の記述として、「かの」が ‘a certain’ と訳されることと、「かれ」と「あれ」はラテン語の is と ille の差に相当することが述べられている。

第2版 (pp. 66-67) では、一人称・二人称と異なり、「三人称の代名詞」のままである。扱われた語は変更され、「か」「かれ」[かれら]、「あ」「あれ」[あれら]となる。この内容には、一人称・二人称の代名詞と同じく、通時的視点から記述を整理されたところがある。それは、「か」と「あ」が古形で、「は」と結合するという点である (p. 67)。

そして、三人称の代名詞は実際には指示代名詞であるという主張と「かれ」と「あれ」の区別がなされる。

「かれ」と「あれ」の区別について先に述べると、この2つの区別とは文体差と意味の差である。文体差は、「かれ」が文語、「あれ」は口語という違いである。意味の差は、古田 (2010a: 215) の指摘にもあるように、初版に見られたラテン語の is と ille の違いだけではなく、「かれ」はあまり遠くないところの人や物、「あれ」はより遠いところの人や物を指すという区別も追加されている (pp. 66-67)。さらに、「あ」「あれ」は、「か」「かれ」に比べると頻繁に用いられないという記述もある (p. 67)。

三人称代名詞が指示代名詞であるという説は、アストンの代名詞観の転換である。まず、名称が他の人称と異なる。人を表す一人称・二人称の代名詞はそれぞれ、「一人称の人代名詞 (personal pronoun of the first person)」と「二人称の人代名詞 (personal pronoun of the second person)」であるのに対し、三人称は、「三人称の代名詞 (pronoun of the third person)」である。そしてこの対照的な名称は、第3版でも変更がない。

三人称の代名詞の記述を見ると、アストンは三人称の代名詞固有の語はないと考えていることがわかる。三人称の代名詞として扱われている語は、初版と同じく「か」「かれ」[かれら]「あ」「あれ」[あれら]で、この点に変更はない。しかし、これらの語は、本来、指示代名詞であると位置づけられる。それを示す箇所を下に掲げる。

Ka, kare (pl. *karera*), *a, are* (pl. *arera*). These words are, properly speaking, the substantive forms of demonstrative pronouns, and mean literally ‘that person,’ ‘that thing.’ (第2版 p. 66)
カ、カレ（複数形カレラ）、ア、アレ（複数形アレラ）。これらの語は、正確には指示代名詞の実質形で、字義通りには ‘that person’ ‘that thing’ を意味する。（引用者訳）

そして、人称は三人称しかないという主旨の一文が「代名詞」の節から削除されたこと（注6参照）を考え合わせれば、人を表す代名詞についてのアストンの論は第2版で転換し、日本語の人代名詞は一人称・二人称だけで、三人称はないとみなしたことになる。

5.2 指示代名詞

DEMONSTRATIVE PRONOUNS.（「指示代名詞」）の節で、いわゆる指示詞が扱われ、初版と第2版にはアストンの考え方に変化がみられる。

初版（p. 24）では、指示代名詞として扱われた語は、「これ」[これら]「この」[それ] [それら]「その」の4語である。「こち（ら）」「ここ（ら）」「そち（ら）」「そこ（ら）」は、本文には記載がないものの、次節の INTEROGATIVE PRONOUNS.（「疑問代名詞」）に代名詞の表（p. 25）にはある。

指示代名詞の記述は、形態論と文法、歴史的変化、意味論・語用論の視点からのものである。形態論は、本文と一覧表から、語根（例「こ」）・実質形／名詞（「これ」）・形容詞形／形容詞（「この」）、方向の副詞（「こち（ら）」）、場所の副詞（「ここ（ら）」）の諸形式が認められたことがわかる。

文法は、文法的性が中性であること、形容詞形と所有形の区別があることである。形容詞形と所有形の違いは、「この」と「これの」が「あの」と「あれの」の違いと同じとあるのみで、「その」と「それの」の記述はない。歴史的変化については、「こわ」が古形・詩形ということのみで、「そ」への言及はない。

意味に関する記述は、「これ」と「それ」の区別である。「それ」は話し相手の近くか何らかの形で話し相手に結びついたものを表す。「これ」は話し手の近くあるいは話し手と関係のあるものを指す（p. 24）。

そして意味の記述とともに、指示代名詞が位置づけられる。この位置づけを述べる前に、初版での人称の代名詞と指示代名詞の関係を確認しておく。表1からもわかるように、初版の構造では、人代名詞と指示代名詞が対等なカテゴリーであり、人称の代名詞は人代名詞の下位区分である。

人代名詞 (personal pronoun)

一人称の代名詞 (pronoun of the first person)

「われ」「わたくし」など

二人称の代名詞 (pronoun of the second person)

「なんじ」「きみ」など

三人称代名詞 (pronoun of the third person)

「あれ」「かれ」など

指示代名詞 (demonstrative pronoun)

「これ」「それ」など

しかし、アストンは、「それ」と「これ」は、二人称の代名詞と一人称の代名詞だという¹² (p. 24)。それゆえ、指示代名詞とされる語は、人代名詞からの転用と考えられる。これは初版における指示代名詞の説の特徴である。

この位置づけは、「それ」「その」の用法によって裏付けられる。すなわち、「それ」が二人称の代名詞であるからこそ「そなた」「そこ」は二人称の代名詞としての用法もあるし、「その」が your に相当することが多く、また、「それ」「その」が言われたばかりで、話し相手の心の中にあると思われたことを指す (p. 24) のである。さらに、一人称の代名詞として列挙された語彙には、語根「こ」を含む語がない。従って、アストンは「そ」を含む二人称の代名詞と「それ」「その」の用法から一般化し、指示代名詞とされる語は、実は二人称の代名詞の語であるという説を作ったと考えられる。

第2版 (pp. 67-70) では、指示代名詞として扱われる語が変わり、同時に人称代名詞と指示代名詞の関係も変わる。

指示代名詞として扱われるのは次の語である。初版とは異なり、カ系とア系が指示代名詞として扱われる。

「こ」「これ」「この」(以下「コ系」)

「そ」「それ」「その」(以下「ソ系」)

「か」「かれ」「かの」(以下「カ系」)

「あ」「あれ」「あの」(以下「ア系」)

記述は、人代名詞と同様、形態論的視点と通時的視点、意味論・語用論的視点からなされる。順序は、意味的な特徴と人称代名詞と関連した位置づけから始まり、その後で、古形も含む名詞形、形容詞形の説明へと続く。

形態論的視点から、指示代名詞は、「語根および古形」「名詞形」「形容詞形」に下位区分され (p. 67)、初版の一覧表にあった副詞形は削除された。語根の扱いも変化し、初版では、「こ」「そ」「か」「あ」は語根として一覧表であげられていただけだったが、第2版の一覧表では語

根かつ古形として、本文中では実質形として扱われる (pp. 66-69)。それによって、指示代名詞の記述が、語根・古形からの語形変化に沿って配列されていることが明確になる。すなわち、通時的視点による整理である。

初版からの改訂のうち、最も大きいのが指示代名詞と人を表す代名詞との関係である。これは意味の記述とともに述べられているので、それを先に述べると、コ系とソ系は、初版と基本的に同じである (p. 68)。表現は異なるものの、コ系は、話し手の近くにあるものと、それぞれに関係のある物に用いられるとされている。また、ソ系は、話し相手と関係のあるもの、言われたばかりでまだ話し相手の心の中にあると思われるものに用いられるとされる。異なるのは、初版で話し相手の近くにあるものは、‘something’ とされていたのが、第2版で ‘persons and things’ とより具体的な表現になった点である。カ系とア系は、第2版で新たに説明が加えられた。その内容は、「かの」と「あの」が、his や her のような人称代名詞の所有格 (原文では *possessive adjective pronouns*) ではなく、指示代名詞の形容詞形 (*demonstrative adjective pronouns*) であること (p. 69) と、「その場にはない」「すぐ近くにはない」(‘not immediately present’) 人や物に用いられること (p. 70) である。

指示代名詞と人代名詞の関係は、第2版になって再分類された。指示代名詞と人称の関連については、古田 (2010a: 214) がすでに指摘するところである。しかし、人を表す代名詞と指示代名詞の改訂を合わせると、これらの代名詞の体系が再編されたと考えられる。

これについてはまず、転用の方向性がある。初版ではコ系は、人代名詞・一人称の代名詞からの転用、ソ系は二人称の代名詞からの転用だった。指示詞にア系とカ系はなく、これらは人代名詞・三人称の代名詞だった。それゆえ、人代名詞から指示代名詞へという転用が初版の考えだった。

それが第2版では、指示代名詞から人を表す代名詞という方向に変わる。コ系とソ系は「一人称の指示代名詞 (*demonstrative pronouns of the first person*)」と「二人称の指示代名詞 (*demonstrative pronouns of the second person*)」になる。そして、初版では二人称の代名詞とされた「そなた」「そこ」が、第2版では「その」とともに、指示詞代名詞から二人称の人代名詞への転用とされた (p. 68)。また、カ系とア系は、「三人称の指示代名詞 (*demonstrative pronouns of the third person*)」であり、「三人称の代名詞」の用法はその転用である。三人称の代名詞の説明と呼応するように、指示詞の説明でも、アストンは、「カ、カレとア、アレは、三人称の人代名詞として言及してきたが、しかしすでに述べたように、実際には指示詞である¹³」と述べている (p. 69)。従って、第2版では、コ系・ソ系・ア系・カ系は、人代名詞と対立する指示代名詞として分類されたと言える。

さらに、人称の概念と代名詞の関係も変わる。初版では、5.1.1 で見たように、人代名詞は動詞が表す人称に応じて用いられる代名詞、という印欧諸語の文法の考えがアストンにあり、日本語の記述はそれに即していた。ところが第2版で、指示代名詞にも人称が認めたとすることは、人称の概念を文法から切り離して、「話し手」や「相手」などと関連する語用論的な

概念として扱ったことになる。それゆえ、人代名詞と指示代名詞は、表 2 のように、人称の概念と交差分類を作ることになる。これは、第 2 版における人代名詞と指示代名詞の体系の再編ということができる。

表 2 『文語文典』第 2 版と第 3 版における人代名詞と指示代名詞

	一人称	二人称	三人称
人代名詞	わ、われ、わたくし	な、なれ、なんじ	(か、かれ、あ、あれ)
指示代名詞	コ系	ソ系	ア系、カ系

出典 Aston (1872) Chapter IIIをもとに筆者作成

そして、佐久間鼎の論と比較するなら、佐久間 (1983: 35) による、「話し手」「相手」「はたのひと・もの」「不定」の軸と「指示されるもの」(「対話者の層」と「所属事物の層」)の軸による組み合わせを、記述という点においては先取りしていることになる(ただし佐久間説の理論的基盤は全く異なる。佐久間の説については、吉田 (2010) で述べた)。

以上、指示代名詞の記述について考察した。初版では形態論と文法、歴史的変化、意味の視点から記述され、第 2 版では通時的視点から形態論が整理された。さらに大きな改訂として、人代名詞と指示代名詞の体系が変更され、人代名詞と指示代名詞が対等のカテゴリーになり、人称と交差分類を作るようになったことを論じ、それが佐久間説と共通点を持つことも述べた。

5.3 疑問代名詞と不定代名詞

初版の疑問代名詞の記述 (pp. 24-25) で扱われた語は、「たれ」と「だれ」、「なに」と「なぜ」「など」、「いづれ」と「どれ」「いづち」「どち」である。記述は簡潔で、アストンの記述の順に従うと、何を問うのか(意味論的視点)、時代差(通時的視点)と文体差、形態論が簡潔に述べられている。例えば、「たれ」と「だれ」は、人について用いられ、「だれ」は現代(アストンの時代)の口語形、語根「た」は「たぞ」「たが」に見られる古い言い回しであるという (p. 24)。「いづれ」も、同じ順序で、人と物に使われること、現代の口語形は「どれ」、「いづれ」も同じ変化をたどり、「いづち」が「どち」に、「いづこ」が「どこ」になるということ、さらに時代差として、古典では‘at any rate’の意がないということも述べる (p. 25)。ただし、「なに」は、「なぜ」「など」等と同根とするだけで、文体差・時代差の記述がない (p. 24)。

第 2 版の記述 (pp. 70-72) では、本文中で扱われる語が変わる。初版には本文中にあった「だれ」「どれ」が、不定代名詞の一覧表 (p. 70) に記載されるだけになる。また、新たに「いか」「いく」「いつ」が追加され、それぞれ「いかなる」「いくつ」「いつか」などの例があげ

られ、英訳も付される (pp. 71-72)。

意味の記述は変わらない一方で、語形の記述は追加される。「た」「たれ」は、語根からの派生の例が、「なに」は、語根への言及が書き加えられた。また、「いづれ」は、「どれ」が削除され、また形容詞形・副詞形への派生が追加されたことで、派生関係が明確になった。これらから、第2版の改訂では疑問代名詞の語の選択と形態論の記述に重点が置かれたと言える。

初版の不定代名詞 (p. 25) の記述内容は大きく分けて2つある。疑問詞が「か」「も」と結合することで不定代名詞になる語についてと、それ以外の語(「ひと」「それがし」「なにがし」)についてである。後者の中では、「ひと」と「それがし」が不定代名詞の機能も果たすことが、英訳(「人」と「それがし」と仏訳(「人」)とともに示されている。「なにがし」には英訳と、名前がわからないときか名前を隠したいときに使われる (p. 26) という説明しかない。

第2版 (p. 72-73) でも、この2つの区分は変わらない。しかし、疑問詞から形成される語には、初版の「たれ」に、「いづれ」「なに」が加えられた。それ以外の語は、初版の3語に「あるひと」「みな」が追加された。「ひと」「それがし」「なにがし」の内容は初版と変わらない。「あるひと」は多用されるという記述だけである。「みな」は、古くは「みなひと」という形があり、のちに動詞を修飾する副詞的用法が生じたことを指摘する (p. 74)。この点で、不定代名詞でも通時的視点が初版以上に現れている。

5.4 配分代名詞と再帰代名詞、関係代名詞

初版では不定代名詞の次に REFLEXIVE PRONOUNS. (「再帰代名詞」) が続く。第2版では、再帰代名詞の前に DISTRIBUTIVE PRONOUNS. (「配分代名詞」) が挿入され、代名詞の記述が拡充された。新規に追加されたこの節 (p. 74) では、「おのおの」と「めいめい」が英語の名詞の each に相当し、「おのおのの」と「めいめいの」が形容詞の each に相当すること、そして「めいめい」が漢語であることが述べられている。

再帰代名詞は、初版では、「おのれ」「わたくし」「わが」「じぶん」「じしん」である (p. 26)。このうち、「おのれ」の記述が最も詳しく、形態論的な記述がなされている。具体的には、属格の「が」を伴う「おのが」、同じく属格の「つ」を含む副詞句「おのづから」、「おのづから」の同義語として「みづから」があり、「み」は「身」の意味であることが説明されている。

その他の記述は簡潔で、「わたくし」は、時代が下ると自己の意味で用いられることのみが記されている。また、「わが」は、特定の人称ではなく一般的に「自分の (one's own)」の意を持つことが述べられている (これは一人称代名詞の「わが」の説明にもある)。さらに、「じぶん」と「じしん」は、自己を表す漢語であることと、口語で用いられることが記されている。

第2版 (pp. 74-75) では、「わたくし」が削除され、万葉集で用いられる「し」が追加された。配列も変わり、「し」、「おのれ」、「み」「みづから」、「わが」、「じしん」「じぶん」となる。「し」は最古の再帰代名詞とされるので、この追加は、通時的視点の現れである。その他の大きな変更点は、初版で「おのれ」との関連で述べられていた「み」「みづから」が取り出され、

独立した段落の見出しとなったことである。これらから、初版に合った形態論的な記述を、第2版では通時的視点も加えてさらに整理したと言える。

RELATIVE PRONOUNS. (「関係代名詞」) についての、初版の論点は、日本語に英語の関係代名詞と関係詞節がないこと、英語の関係詞節は、日本語では連体修飾節になること、その場合、動詞は連体形 (attributive form) になること、そして、関係詞節を作る「ところの」は中国語からの直訳であること、の4つである (p. 26)。

第2版 (pp. 75-77) でも、この4点は変わらない。しかし、「ところの」については、内容に改訂がある。初版では、「ところの」を用いた文に対して批判的であったのに対し、第2版では「ところの」の構文が現代では時代を遡ると見られなくなり、アストンの知る限り『徒然草』が最古の例であることに変更された (p. 76)。これは通時的視点からの改訂である。

もう一つ、重要な変更がある。日本語と英語の文法構造の違いについての記述が大幅に追加されたことである (pp. 76-77)。その第一点は、日本語の連体修飾節と被修飾名詞の構造が、英語の 'the stolen goods' のような句とドイツ語の同じタイプの句にも見られることである (p. 75)。第二点は、連体修飾構造が、英語の関係代名詞が主格以外でも用いられることである。アストンの例には、「花咲く山」と 'The mountain on which flowers are unfolding.' がある (p. 75)。第三点は、英語で受動態を用いるところで、日本語では能動態を用いることである。アストンの例では、'a man who is called Denkichi' が、日本語では「でんきちといふもの」(p. 76) とされる。これによって、「関係代名詞」の記述が通時的視点だけでなく、対照言語学的な視点からも充実したと言える。

6. 数詞と助数詞

数詞と助数詞の記述を初版と第2版で比べると、第2版で数詞も助数詞も記述が増え、形態論や文法の記述も追加されている。第3版では、数詞と助数詞一覧における漢字表記の削除と、「800」の和語「やほ」の追加、助数詞「折」の記述の大幅な削除がある。この改訂は数詞の記述の核心に影響しないので、以下、初版と第2版を検討する。

初版には、NUMERALS. (「数詞」) と AUXILIARY NUMERALS. (「助数詞」) という2つの節があり、どの形式をどのように使うかという観点からの記述がある。

第2版では、「数詞」のあとに ORDINALS. (「序数」)、「助数詞」のあとに AUXILIARY NUMERALS OF JAPANESE ORIGIN. (「和語の助数詞」) と AUXILIARY NUMERALS OF CHINESE ORIGIN. (「漢語の助数詞」) が追加され、合計5つの節になった。(表1参照)。「和語の助数詞」と「漢語の助数詞」は、初版では段落で区分されていた内容を分離し、拡充したものである。

初版における「数詞」(pp. 26-28) の要点は、(1) 和語の数詞と漢語の数詞の例示 (1 から 10000 まで。12 を超える数は抜粋)、(2) 和語の数詞の用法 (11 以上の和語数詞の廃用化や

10までの和語数詞の用法など)、(3) 和語の数詞・数詞を含む表現の語構成(「1868」のような複合語の形式が英語と同じ構成であること)、助数詞「つ」と属格の小辞「つ」の関係など)、(4) 漢語の数詞の用法、である。

第2版(pp. 77-80)では、数詞の増加と和語数詞の訂正と追加が見られる。1から1,000,000と対象が広がり、和語数詞も漢語数詞もそれに伴って増加し、訂正も加えられた。そして、形態論的分析と語誌も追加された。例えば、語末の「つ」(「ひとつ」など)、「ち」(「はたち」など)、「ぢ」(「みそぢ」など)、「づ」(「よろづ」)の解釈がある。初版でも「ふたつ」などの「つ」が属格の小辞と同じであるとアストンは考えていた(初版 p. 27)。それが第2版では、「つ」「ち」「ぢ」と、アストンは断定していないものの、「よろづ」の「づ」が、属格の小辞「つ」の異なる形態という解釈に発展した(p. 78)。さらに、「やつ」の語誌、10を超える数の和語数詞の廃用化、「まり」の語誌への言及もある(pp. 78-79)。

第2版で追加された「序数」では、序数の原則(接頭辞「第」か「番目」「号」を名詞の後ろに付す)と例外(「安政2年」)が述べられた。これは『口語文典』第2版(p. 24)と同じである。ただし、『文語文典』第2版では、日本語に序数を示す固有の語はない(p. 80)と日本語の数詞の特性が明確になっている。

初版における「助数詞」の節(p. 28)はわずかである。要点は、日本語では数詞を名詞に直接つなげず助数詞を用いることと、助数詞は英語の‘six head of cattle’のような数え方に相当すること、助数詞は漢語がほとんどで和語は少ないこと、である。

第2版では、語数が大幅に増え(和語助数詞が24語、漢語助数詞が39語)になり、和語助数詞と漢語助数詞に対する考え方も変化した。初版では「助数詞はほとんど中国語起源」(p. 28)、「たとえば「はしら」のように和語は少ない」(p. 28)とあるのに対し、第2版でその箇所は削除され、和語助数詞と漢語助数詞の語と例文が列挙された(pp. 80-83)。

助数詞の記述の大きな相違点は、数詞と助数詞が現れる位置を文法的に説明した点である。初版ではまったく記述がなく、「牛六匹」など漢語の助数詞の例と、和語の助数詞の例「二柱の神」だけだったのが、第2版では「名詞+数詞+助数詞」(「牛六匹」)と「数詞+助数詞+属格「の」+名詞」(「二柱の神」)の2つの型があるという記述が追加された(p. 80)。

7. 副詞と接続詞、間投詞

ADVERBS. (「副詞」)と CONJUNCTIONS. (「接続詞」)、INTERJECTIONS. (「間投詞」)は、独立した項目であるが、記述が少ないので、まとめて述べる。

初版では「副詞」と「間投詞」の短い節があり(p. 28)、第2版以降で「副詞」と「接続詞」、「間投詞」となる(第2版 pp. 84-86)。これらの節の改訂から、わずかではあるが、形態論や語誌に着目するアストンの視点を読み取れる。以下、要点のみ示す。

「副詞」では、初版では、「な」に属する語には多くの副詞があるということと、それらは、

すべてではないにしろ、ほとんどは実際には名詞と変わらないということが述べられているだけである (p. 28)。第2版では、副詞の形式、派生方法、オノマトペの3つに増える。副詞の形式については、「語根+ {に/と}」があり、「に」「と」は省略可能であること、また、語根のみで用いられる(「いま」「こんにち」など)語があることが述べられる (p. 84)。そして、それに続いて、副詞として機能するほとんどの語の派生は名詞と同じであるとある (p. 84)。その派生方法とは、名詞の複合と語根の反復である。例えば、「いま」は「いる」の語根「い」と「ま(間)」の複合、「だんだん」「だびたび」などは語根の反復である (p. 84)。

「接続詞」で、アストンは、日本語に接続詞として独特の形態を持つものはないと考えており、この節 (pp. 85-86) の中心は、動詞や形容詞の副詞形 (adverbial form) が接続詞と同等の機能を果たすということと、名詞と名詞を接続するとき、英語で *and* を用いるところで日本語は語を何も置かないということである。とはいえ、「かつ」や「また」が句の冒頭に、「間」や「故」が動詞の連体形のあと、句の末尾に置かれること、当時の書簡体や公式な書体で用いられることが指摘されている。

「間投詞」では、説明は初版ではただ1行、「他の言語と同じように、間投詞に文法はない」(初版 p. 28) とあるだけである。第2版では、活用のない語に属するということと、「いざ」「あな」などを含む例文5つが追加された。

8. まとめ

本研究では、アストンの『文語文典』の初版と第2版の第2章と第3章を比較し、どのような視点からの記述によってなされたかに注目し、改訂について検討した。先行研究との比較によって、この方法で「活用しない主要語」の説の変遷を考察することが課題として残されていることを示した。そして、『文語文典』の章構成と、第2章の内容、第3章の構成を提示した。その後、初版と第2版の第3章を、アストンが立てた節に基づいて比較した。

その結果、特に派生名詞や人代名詞、指示代名詞の記述に代表されるように、初版では、頻度や文体差、形態論、意味論・語用論という視点からの記述が中心だったのに対し、第2版では、通時的視点や形態論的な視点から記述が整理された傾向にあることが明らかになった。筆者の分析では、「派生名詞」「尊敬の接頭辞」「一人称の人代名詞」「二人称の人代名詞」「三人称の代名詞」「指示代名詞」「疑問代名詞」「不定代名詞」「再帰代名詞」「関係代名詞」「数詞」に、この傾向が見られる。一方、記述量が少ない節(「名詞」(単純名詞)、「混種複合語」、「謙譲の接頭辞」「性」、「数」、「配分代名詞」、「接続詞」、「間投詞」)では、内容の質的变化が見られなかった。

また、人を指す代名詞と指示代名詞の記述を子細に検討した結果、人代名詞と指示代名詞の間の転用の方向が変わったことを示した。さらに、この2つの代名詞の体系が変わり、人代名詞と指示代名詞が人称と交差分類を作るように改訂されたことも明らかにした。

【注】

- 1 古田氏の論文は、学術雑誌に掲載された初出と、校訂を加えられ、論文集『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』(くろしお出版、2010年)に収録されたものがある。筆者は両者を参考にしたが、本稿での引用は論文集にもとづくことにし、初出は参考文献一覧に記すことにした。出版年に付した a・b・c は、論文集の収録順である。
- 2 古田 (2010b) の議論の中で最も遅いのは Bruno Lewin による *Abriss der Japanischen Grammatik* (1959年初版)。
- 3 初版では Auxiliary Verbs、第2版以降では Humble and Honorific Verbs, Auxiliary Verbs, Verbs used as Adverbs and Conjunctions。第8章の改訂や Auxiliary Verbs という概念については、古田 (2010c) の考察がある。
- 4 ‘Derivative nouns are not very numerous. The most commonly met with are Abstract nouns formed by adding *sa, ke* or *mi* to the roots of adjectives.’ (初版 p. 18)
- 5 アストンの表記を平仮名に転記した。原文 (第2版 p. 50) では、‘Shidzu-ka naru’ と ‘Shidzu-ka ni’ である。
- 6 第2版で改訂された箇所もある。初版 (p. 21) の ‘To the mind of a Japanese, there is only one person, the third.’ (「日本人の心の中には、人称は一つ、三人称しかない」(引用者訳) という一文が、第2版では削除された。この削除は、三人称の代名詞は指示代名詞という見解 (第2版 p. 66) と一致している (5.2.4)。
- 7 この点は、『口語文典』を引き継いでいる。代名詞の使用が限定されることと、強調のために代名詞が用いられることは、『口語文典』初版 (p. 9) にある。また、曖昧さの回避は、『口語文典』第2版 (pp. 14-15) にある。
- 8 扱われた語を列挙するとき、複数形を [] で示すことにする。
- 9 ‘the most common word in the written language for the pronoun of the first person’ (初版 p. 21)
- 10 ‘*Watakushi* (plural *watakushira* or *watakushidomo*) is in the spoken language the commonest word for the pronoun of the first person.’ (初版 p. 22)
- 11 ‘As a pronoun, *watakushi* (私) belongs to the spoken language, and to modern epistolary correspondence, where it is the commonest word for ‘I.’’ (第2版 p. 57)
- 12 ‘*Sore* is properly speaking a pronoun of the second person, and mostly refers to something situated near to, or in some way connected with the person addressed, while *kore* is of the first person, and relates to objects close to, or connected with the speaker.’ (初版 p. 24)
- 13 ‘*Ka, kare, and a, are* have been noticed as personal pronouns of the third person, but as already observed, they are really demonstratives.’ (第2版 p. 69)

【参考文献】

- Aston, William George (1869) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Nagasaki: F. Walsh.
- (1871) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Second edition. Belfast: F. D. Finlay and son.
- (1872) *A grammar of the Japanese written language, with a short chrestomathy*. London: printed for the author, at the office of the "Phoenix."
- (1873) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Third edition. London: Trübner and Co..
- (1877) *A grammar of the Japanese written language*. Second edition. Yokohama: Lane, Crawford & Co..
- (1888) *A grammar of the Japanese spoken language*. Fourth edition. In: *Collected works of William George Aston*. Vol.2 Bristol: Ganesha Publishing, Tokyo: Oxford University Press Japan.
- (1904) *A grammar of the Japanese written language*. Third edition, Revised and Corrected. In: *Collected works of William George Aston*. Vol.2 Bristol: Ganesha Publishing, Tokyo: Oxford University Press Japan.
- 金子 弘 (2010) 「アストン「文語文典」改訂の性格」『日本語日本文学』20: 37-46 創価大学日本語日本文学研究会
- 佐久間 鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版
- 杉本 つとむ (1999) 『西洋人の日本語研究』杉本つとむ著作選集 10 八坂書房
- 古田 東朔 (2010a) 「コソアド研究の流れ (一)」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓 (編集) 古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション第3巻 くろしお出版 【初出『人文科学科紀要』71 国文学・漢文学 20 東京大学教養学部人文科学科国文学研究室漢文学研究室、1980年】
- (2010b) 「アストンの日本文法研究」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版 【初出『国語と国文学』55 (8) 東京大学国語国文学会、1978年】
- (2010c) 「アストンの敬語研究—人称との関連について」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版 【初出『国語学』108、1974年】
- 吉田 朋彦 (2010) 「研究史としての「こそあど」—佐久間鼎のリズム研究から指示詞論まで—」上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』明治書院

The Revision of ‘Uninflected Principal Words’ in W. G. Aston’s
A Grammar of the Japanese Written Language:
His Perspective Shift and the Reorganization of Personal Pronouns
and Demonstrative Pronouns

Tomohiko Yoshida

Abstract

This paper examines the chapters on ‘uninflected principal words’ in all the editions of W. G. Aston’s *A Grammar of the Japanese Written Language*. The results show that most of the sections were revised from morphological and diachronic viewpoints. This paper also focuses on his descriptions of Japanese demonstratives and claims that the system of Japanese personal and demonstrative pronouns was reorganized in the second edition.

Key words: W. G. Aston, *A Grammar of the Japanese Written language*, Japanese personal pronouns,
Japanese demonstratives